

第44回現代短歌大賞・ 第65回現代歌人協会賞授賞式報告

高木佳子

二〇二一年十二月二十三日(木)

午後六時より、東京神田の学士会館において、一般社団法人現代歌人協会「第44回現代短歌大賞・第65回現代歌人協会賞」の授賞式が行われた。このうち第65回現代歌人協会賞授賞式は、本来は昨年六

現代歌人 協会会報 170

月の第66回定時総会後に行われるはずだったが、コロナ禍の影響により延期されていたものである。式は関係する協会役員、マスコミのみ出席、六十名で開催された。

開会の辞に続き、栗木京子理事長が挨拶した。理事改選や『二〇二〇年コロナ禍歌集』刊行、協会ホームページの刷新、全国短歌大会の特別選評のネット配信等に触れ、今年度からの協会の新たな取り組みが報告された。

続いて授賞式に移った。第44回現代短歌大賞は、外塚喬氏の『鳴

禽』(二〇二一年八月刊・本阿弥書店)とこれまでの全業績についてである。(※次ページ以降に詳細)はじめて選考経過を選考委員長の栗木京子委員長が、次いで小島ゆかり理事が祝辞を述べた。

小島理事は『鳴禽』の作品を挙げながら「身边を丁寧に描写し、折々の人間的葛藤を虚飾なく表現し、近年はさらに滋味深く自在な歌境になられた」と祝った。これに外塚氏は「これまで多くの人に助けられてきた。師の木俣修も折々に温かい言葉をかけてくれた。これからも歌を詠み続けたい」と述べ、今後の抱負を語った。コロナ禍下ではあったが、結社「朔日」の関係者、協会よりの花束贈呈など、会場は華やいだ雰囲気になった。

続いて、第65回現代歌人協会賞の授賞式にうつり、選考経過を選考委員長の坂井修一理事よりなされた。(※協会賞の決定の経緯は二〇二一年九月発行の会報一六八号にて報告)

受賞歌集は川野芽生氏の『Lily』と北山あさひ氏の『崖にて』である。

坂井氏は選考経過についてそれぞれの作品を挙げ「両者の作品に抑圧や敵対といった対世界の姿勢が見えた」とし、次歌集へのさらなる期待を述べた。続いて祝辞にうつり、春日いづみ理事が『Lily』

について、作品の世界観や主題に触れながら、「言葉による精緻な像を一体一体巡り、そこから発せられる息遣いを聞くような気持ちとなった」と言葉を贈った。次に大松達知理事が川野氏との交流のエピソードを交え「ジェンダーや世界文学といった川野氏の世界空間が、有形無形に言葉として屹立している。今後も期待したい」とあたたかな言葉を贈った。

同時受賞の北山あさひ氏の『崖にて』について、選考委員を務めた沖ななも常任理事は「現実には風穴を開けてゆくタイプの作品。社会性が基底にあり俗な題材も厭わない、詠わなければ前に進めないという強さがある」と述べ、今後への期待の言葉を贈った。また、

吉川宏志理事は「絵画表現に『生動』という言葉があるが、北山氏の作品も『生動』している。自在に発想を広げ、簡単な言葉で人間の本質が表現されている」と祝いの言葉を贈った。

続いて賞状・副賞の授与、花束贈呈が行われ、受賞者挨拶に移った。川野芽生氏は自身の歌の美的資質を挙げて「歴史上の数々の芸術が女性を美のアイコンとして用いてきたが、女性はそこで人格を認められず、常に抑圧と搾取の対象として在った。自分が今、何らかの対象を美しいと思うことは、同様に対象への搾取を孕むのではないか。そうした美への既存価値への疑問と葛藤を作品にしていきたい」と述べた。

北山あさひ氏は『崖にて』という歌集題の「崖つぶち」という由来を述べ「小樽沿岸の崖を沖合から見ると、その崖は百年前のニシン漁のヤン衆やアイヌの人たちも沖から同じ景を見ていたのだと思うと胸がうずいた。誰も見向きをしない荒涼とした景色に惹かれるし、そこに私にしか詠めないものがあると思う。さらに一人でいた崖を下り、『北』を指したい」と述べた。

コロナ禍により、例年どおりの形式では行われなかったが、二つの授賞式、三人の受賞者に、参加者の大きく温かい拍手が贈られ、式が閉じられた。



左から現代歌人協会賞受賞者の北山あさひさん・川野芽生さん・現代短歌大賞受賞者の外塚喬さん